

浙江省南部歴史調査報告（麗水・温州篇）

宋代古墓を中心として

佐々木愛・大澤正昭・兼田信一郎・石川重雄・戸田裕司

1 調査目的および調査概要

2019年12月25日から29日にかけて、我々は浙江省麗水市および温州市で宋代古墓および関連する史跡の調査を行った。本調査は2017年に科学研究費基盤研究（B）海外学術調査「宋代古墓調査にもとづく伝統中国の社会・家族・ジェンダーの歴史的研究」の採択に伴って実施したものである¹⁾。

今回の調査地は、我々がこれまで調査を重ねてきた福建省北部地域に隣接する浙江省側の地域である。ただし地図上では隣接しているとはいえ、これまでこの地域を一体とみなす見方はあまり一般的でなかったのではあるまいか。よく知られているように、浙江福建の交界地帯には障壁となる山地があるため、浙江省から福建に行こうとする場合、迂回して江西から福建入りするのが伝統的な交通路だったからである。しかし、昨冬われわれが福建北部政和県で調査を行った際、政和県から直接麗水に抜ける交通路が古来あったという話を地元の人から聞いた。全国的な交通動脈とは別に、地域的な地元の交通路が存在し機能しているのは十分ありえることである。今回の調査は、福建北部との関係性や比較を念頭におきつつ、宋代古墓という視点から当該地域を考察することを目的とするものである。

麗水市内には宋代古墓は相当数残っていたが、そのうち行程上適当であった何称・何澹・何処仁の三か所を選定した。何称は何澹の父、何処仁は何澹の弟である。何澹は慶元党禁の首謀者として朱熹ら道学派を排除した人物であり、これまで

調査旅程表

日付	時刻等	地点	事項
12月25日 (水)	9:15	東京羽田空港	日本航空JL0081便
	11:45	上海虹橋空港	
	9:30	関西空港	中国東方航空MU730
	11:20	上海浦東空港	
	14:35	上海虹橋駅(合流)	高速鉄道G1635(福州行)
	16:44	衢州駅	
12月26日 (木)	8:25	宿舎	【専用車利用開始】
	10:10	麗水市遂昌県	遂昌金鉱国家鉱山公園
	12:45		
	14:20	麗水市蓮都区碧湖鎮堰頭村	通濟堰
	16:10		
	16:30	麗水市蓮都区碧湖鎮	碧湖鎮古街、碧湖郷賢館
	17:30		
18:25	宿舎		
12月27日 (金)	8:30	宿舎	
	9:00		
	9:30	麗水市蓮都区(市街)	処州府城壁・南明門
	10:15	麗水市蓮都区碧湖鎮堰後村	何称墓
	11:35		
	11:45	麗水市蓮都区碧湖鎮保定村	何澹墓
	12:15		
	12:35	麗水市蓮都区大港頭鎮大港	何処仁墓
	14:15	頭村・玉溪村	
	16:05	温州市鹿城区水心路海壇山	葉適墓
	16:20	公園内	
	16:40	温州市鹿城区水心路	温州葉適廟(恵心観)・地藏橋
	17:00		
17:20	温州市鹿城区金鎖匙巷	葉文定公祠跡地	
17:35			
17:50	宿舎		
12月28日 (土)	8:30	宿舎	
	8:35		
	9:05	温州市鹿城区水心路	温州葉適廟(再調査)
	9:10		
	10:45	温州市鹿城区人民西路	妙果寺
	11:10		
	11:30	温州市鹿城区墨池坊	墨池
	13:00	温州南駅	【専用車利用終了】
	14:02		高速鉄道G7600(徐州行)
18:15	上海虹橋駅	空港バス(機場1号線)・タクシー	
18:35			
20:20	宿舎		
12月29日 (日)	9:00	宿舎	
	12:10	上海浦東空港	日本航空JL0874便
	15:45	東京成田空港	
	12:15	上海浦東空港	中国東方航空MU747
	15:40	関西空港	

我々が調査してきた道学者の墓や顕彰のありようと比較が行えると考えたのである。また当地の地理的景観を知るために、何澹が修築にも関わった通済堰も訪ねることとした。さらに当地は旅程上温州に出ることが適当であったことから、永嘉学派の雄・葉適と葉適を祭る祀廟を調査することとした。永嘉学派葉適の墓や葉適の顕彰の状況は朱子学との比較上からも適切な調査対象と考えたためである。また恒例の仏寺参観として妙果寺（温州市松台山南麓）を訪ねた。妙果寺参観は実は当初計画していたものではなかった。当初は文天祥祠を有する江心寺を調査する予定であったのだが、出発直前になって、江心寺は工事のため境内が全面参観停止されていることが判明したため、急遽変更したのである。妙果寺には古墓や宋人ゆかりの祠堂こそなかったが、温州の中心に位置し人々に親しまれている古刹であり、本寺の参観は当地の仏教文化を知るために有益であった。

具体的な旅程は前頁の表のとおりであり、以下の各章において、参観した史跡の調査を報告していきたい。なお、参観地のうち、遂昌金鉞国家鉞山公園については、これまで中国の鉞山史跡について紹介されたことは殆どなく、また中国鉞山社会史研究が現在ほとんど行われていないという研究状況を鑑み、別稿を用意してより充実した形で報告を行うこととし、本稿での報告は割愛することとした。なお、各章の担当は以下の通り。1、6、7章＝佐々木、2章＝大澤、3章＝戸田、4章＝兼田、5章＝石川。

（佐々木）

2 景観の特徴

今回の調査地域は浙江省第二の大河とされる甌江の流れに沿った三か所であった。つまり①甌江上流部、松陰河流域の遂昌金鉞鉞山公園、②中

流域の盆地に位置する麗水市、碧湖鎮周辺、③下流・河口部の温州市街である。この地域は2018年末に調査した福建省北部ルートのさらに北方にあたるが、景観から言えばこれと大きな違いはない。ただ甌江の流れとともにほぼ東南東方面に下ったので、浙江省南部地域の東西横断面を見たような印象もあった。

我々は12月26日に衢州を出発した。龍麗高速道路に乗り、思いのほか広大な衢州東部の平原を通りぬけて、東南方の仙霞嶺山脈に上っていった。高度が上がるとともに平野から山地の風景に変わり、これまでの調査で見慣れた茶畑が現れ始めた。地図を見るとこの付近にはいくつかの「○○畬族郷」という畬族の居住地区を示す地名がある。唐宋時代の史料でもなじみがあった畬族である。ただ、現在は少数民族に指定されていると思っていたので、これほど多くの居住地区が存在しているとはまったく予想外であった。焼畑の民であった畬族がこのあたりに住んでいるとすれば、かつては普通の農耕には適さない山地だったはずである。宋代に思いをはせれば、いまよりも多くの畬族が活動しており、焼畑の煙も見えていたのかもしれない。この位置関係は漢族と畬族の距離がかなり近かったことも示している。今回調査する古墓の主はこのような民族的境界地域の出身だったのだと、改めて思った。

さらに進んで、急な上り坂の先に遂昌金鉞鉞山公園があった。付近の山頂の標高は1000メートル余りと地図に記されており、鉞山の入り口付近も相応の高度があっただろう。曇天ということもあり、かなり寒い。鉞山の一部は現在も稼働しており、金や銀を産出しているという。本鉞山については別稿での報告が予定されているので、ここでは触れない。

次いで今回の調査地域のもっとも特徴的な景観を示す、碧湖鎮の通済堰に向かった。通済堰は世界灌漑施設遺産に登録されているという中国

有数の水利施設である。南朝梁時代の天監四年(505)に造られたとされ、甌江の水を下流の農地に分けるための施設である。当初の灌漑面積は「二十万畝」といい、木材で造られていたが、宋代に石積みに改修され、閘門が造られるなど機能が強化されたという²⁾。こうして現在まで1500年以上にわたって維持され続けている、重要な灌漑施設であった。通済堰で取水された水は高低差20メートルという地勢を利用して碧湖鎮およびその下流の平原を潤している。我々のバスはこの平原を通り過ぎたが、初期に開かれていたと思われる水田はあまり見えず、畑地が多いという印象であった。いまは畑作や近郊農業が盛んになっているのであろう。農業生産のあり方は時代や経済事情によって異なるので、これがかつての景観とどれほど共通するかはよくわからない。とはいえ農業にとってきわめて有利な環境が歴史的に作られてきたのである。



写真1 通済堰

こうした通済堰周辺の状況を参観した後、我々は碧湖鎮の街中に入った。ホテルにチェックインする前に老街を参観していたところ、改築中の家々が目立つ街中に、鎮の歴史や著名人物を顕彰する記念館、「碧湖郷賢館」をみつけた。これも新築されて間もない、整然とした施設である。ここでは当然のことながら、通済堰の解説展示が大きな面積を占めていた。その詳細な解説、展示は、

通済堰のみならず、この地域全体の把握に大いに役立つものであり、我々も本日の現地参観の意義を考え直すことができた。

翌27日に碧湖鎮周辺にある何氏の古墓を調査した後、我々は温州に向かった。麗水市から温州までの高速道は大部分が甌江に沿って設置されていた。ただこの道路のかなりの部分は、河岸ではなく、河川の縁に無数の橋梁を立て、その上に造られたものであった。それはまさにこのルートが、平地の少ない括蒼山・雁蕩山地区を通り抜けて海岸部に出るルートであることを示していた。

このように内陸部の豊かな盆地から山地を抜けて海岸部に至る景観は、これまで調査してきた福建省と共通している。一般に福建省は貧しくそのため多くの華僑が出国していったというイメージがあるが、それは海岸部のイメージである。確かに、福建省中央部から東の海岸部まではそれなりの高度を持つ山地であり平地はないに等しい。農業生産などほとんど望めない地域であり、農民人口を受容する余裕はなかった。それが貧しさと同視されてきたのである。今回の調査地域は浙江省ではあるが、福建省に隣接する、同じような環境であった。海岸部もまた海と山が入り組んだ地形であり、それらは海港として利用するには最適であった。そのため温州などの海港は物流の拠点として栄えたのであろう。永嘉学派などといわれる学統を生み出した文化活動は、こうした経済的基盤を背景としていた。

以上に見てきたように、今回調査したルートは浙江省南部をほぼ東西に横断するものであった。早くから高速鉄道が敷設された内陸部・衢州の河谷平野地域から出発して山地を越え、碧湖鎮などの豊かな盆地地区へ下る。さらに山地を横断して海港が栄える海岸部・温州に至るというものであった。これが景観の簡単な全体像である。そうしてこれを歴史的に考えれば、前近代には、つまり農業生産を基盤とする時代には山間の盆地地域

が重要な位置を占めていた。しかし、おそらく元代以後の海運の発展を主体とする物流の増大とともに、海岸部の諸都市が重要性を持つようになっていった。その動きは近代以降さらに加速されたのであった。

蛇足ながら、最近の新型コロナウイルスの流行で武漢に次いで温州が封鎖されたのは、両地の人的交流の活発さを示す事例である。はるかな距離を乗り越え、いまや温州と武漢は人と物資の流通によって密接に結びついていた。これを歴史的にどう説明するのか、我々に提示された研究課題の一つである。
（大澤）

3 何称墓

(1) 何称墓の位置

2019年12月27日、麗水市市区を離れ、前日訪れた通済堰を過ぎ、松陰溪の左岸を少し遡り、何称墓の参観を試みた。『中国文物地図集 浙江分冊』³⁾（以下『文物地図』と略記）の記事に導かれ、1959年に発掘された何称墓がある右岸を目指した。しかし、我々のバスは堰後村（行政村）の入口でもある橋の手前で足止めを食うこととなった。バスが大きすぎたため、幅員が狭く、車高制限もかかった橋梁をわたることができなかったのである。

やむなく下車して堰後村への入口でもあるこの橋を渡った。橋を渡って正面は山で、道は直ちに左右に分かれる。右へ行けば堰後村の中心聚落であるが、我々は左に向かい、未舗装の道の凸凹に足を取られ、水たまりを避けつつ、歩くこと約20分間。輻馬鄭なる聚落（自然村）に辿り着いた。

閑散とした村で、最初に何称墓の所在を尋ねた老婆に「その様なものはない」と言われてしまい、いきなり気が滅入る思いであった。何称は、それまで木造であった通済堰を一新して石造の施設に改修した参知政事・何澹の父であり、自身も浙東提挙・福建提挙までつとめた高官である。その

墳墓の存在そのものをいきなり否定されたことに当惑したが、この間の古墓調査ではいつも同様の体験をしている。墓というものは族人でもない者が関心をもつようなものではないと思えば、当然のことであろう。

かれこれ10分間ほどたった頃、聞き込みを手伝ってくれたガイドが、50元払えば何称墓まで案内するという年配の女性を見つけてくれた。彼女に着いて茶畑の間を縫うように聚落南方の低山へ歩を進めた。行くこと数分、彼女の夫・Z氏が合流し、今度は彼の案内で先に進み、徐々に雑木の茂る山あいの獣道に分け入った。聚落を出てからおおよそ15分間も歩いたであろうか。道の傍らに唐突に石人が見えた。『文物地図』には「墓前尚存石武士・石馬等墓儀刻石、造型生動、刻工精緻。」とあるが、この石人は（大きく毀損されているが）文官像に見えた。これ以外に石人・石獣などは見つけることはできなかった。



写真2

何称墓手前に残っていた石人



写真3

何称墓があったという場所
発掘調査を経て現在は何も無い

ともあれ何称墓の至近に達したわけである。そこからやや急になった傾斜を数分上ると、近年建立された夫婦墓⁴⁾がある。Z氏はその墓に向かって右側の雑木林を指さし、ここが何称墓（があった場所）であると言った。

その墓（があったという場所）の傍らで、Z氏は15分間ほど質問に応じてくれた。以下、氏の発言内容を紹介する⁵⁾。

(2) Z氏からの聞き取り内容の整理

直前に見た石人に関連して、『文物地図』でも触れられている石像については、

「両隻文的、両隻武的」（文官像・武人像各2体）はあったが、他はなかった。〔自分の身長よりやや高いところまで手を上げて⁶⁾〕大きさはこれぐらい。〔19〕59年に政府の人が発掘して全部持っていった。彼らは何もいってくれなかったので、あなたにも言えない。

と述べる。別の遣り取りでの「石人はなかったが、將軍（の石像）はあった。」といった発言と矛盾するようにも思われるが、これは「石人」の解釈のズレであろう。また、Z氏の発言によると1959年の発掘調査員は文官像も持ち去ったはずであるが、『文物地図』には文官像の記事はない。また文官と見える上記の石人との関係などやや疑念が残る。

当時の墓の様子に関して、単独墓か夫婦合葬墓なのかが我々の問題意識としてあったのであるが、この点については、次の通り「二人の墓」と応答している。

二つの「棺材」⁷⁾があった。二人の墓だ。ただ、（本当に）人が埋められていたかどうかは分からない。「棺材」の中は石灰が詰まっていた、紙もあった。カビが生えていた。

遺骸の存否が不明瞭なことが若干気になるが、これに関して氏は次のような伝承を紹介してくれた。

何称は36の墓を作ったが、本当の墓がどれなのかは、彼の娘しか知らない。だからここが本当の墓なのかどうか分からない。

我々はこれと全く同じ話を、2018年12月に、福建省浦城県で、真徳秀墓の墓についての伝承として現地住民から聞いたことがある⁸⁾。あるいは、浙江南部から福建北部にかけての山間地区に共通する逸話・伝承の“型”のようなものがあるのだろうか。

出土品等については、「墓の中に鉄牛があった」という以外には「珍貴の東西」と述べるに止まり、『文物地図』にある「緑地醬彩“纏枝牡丹”梅瓶」など具体的な言及はなかった。

また、かなりの時間を費やして、次のような話を聞かせてくれた。地域の伝承の1つであろう。

忠臣の何丞相はダム（壩）の建設に多大な貢献した大した人物だ。この下の平地に姦臣の湯丞相の墓があって、彼は権力を守るために何丞相と対立した。

『宋史』巻394 何澹伝・同書巻371 湯思退伝には両者の対立・争論の記事は見えない。そもそも湯思退は何澹より29も年長であり、「権力を守るため」ことさら何澹を標的として事を構えるとは考えにくい。

ただ、湯思退は秦檜派とされ、『宋史』以来古今の歴史評価の中で、張浚など主戦派の「愛国将領」を弾圧した事を非難されている。Z氏（あるいは地域の住民）が、何澹の功績をより際立たせる目的で、地元出身の「姦臣」を持ち出すことは十分に有り得る事のように思われる。

上記の逸話は、歴史事実としては首肯できない。しかし、地元の歴史人物（の功過得失）を伝えるために脚色された「歴史小故事」としては真実味がある。古い碑文などや、現代の施設建設・観光開発とは異なる民衆的な顕彰の一例として興味深く感じた。

何称墓の傍らでのZ氏との遣り取りは、言語のハードルも高く、その場で適切な質問を繰り出して掘り下げていくという点では拙いものであった。しかし、改めて検討してみると、『文物地図』の記事を補足する内容も多く、何称墓と直接かわらない話の中から文献史料に取り組みの要点も見出すことができた。

また、特に紹介はしなかったが、古来この地域と隣接する福建との移住の活発さを窺わせる言及もあり、初めて訪れた浙江南部の歴史・地域相

のイメージ形成に裨益するところ大であった。

（戸田）

4 何澹墓・何処仁墓

(1) 何澹墓

何称墓を見た後、我々はチャーターしているバスで一旦碧湖鎮にもどり、省道 50 号線を再び西に向かい、11 時 45 分頃「保定鳳凰山公墓」なる看板のある地点に到着した。『文物地図』には何称の子何澹の墓が保定の鳳凰山にあるとし、上冊の地図にも載っている⁹⁾が、ここは現在公営墓地のようだった。

バスを降りて砂利道を進んでいくと、数分で山陵の南斜面の麓に広がる公営墓地が見えてきた。墓地全体を区切るような施設はなく、階段状に整備された墓域に、奥の方から比較的新しい墓がつくられ、上方にやや古い墓（民国期のもの）が散在する。新設の墓も、手入れが行き届いているとは言い難く、香炉などが散乱している状態だった。また、葬儀直後だったのか、真新しい花輪が置かれた墓もあった。

ガイドの J 氏が整備業者に聞いたところでは、何澹墓は墓地の西側にあるというので、そちらに向かった。西側に背の高い木が 1 本見え、それを目印に丘に向かった。その木のところからやや南に進むと、1メートル強の段差がある場所に出、段の上部に墓碑があり、墓碑の背後に土を円形に盛った墓封らしきものがあった。墓碑には「枢密院事兼参知政事金紫光禄大夫太子少師贈大師衛国公」という肩書と「何澹公」「朱氏慧観」の名や生没年などが金色の簡体字で刻まれていた。段差のあるところは、石をコンクリートで固めた壁が作られていた。その壁を降りて墓と向き合うと、「何澹墓」と刻む、文物単位を示す石碑が左側の茂みの中にあっ

た。何澹墓の墓碑や封土は明らかに最近作られたもので、墓全体が整備中の状態と思われた。壁の



写真 4 何澹墓

下には、小さな花輪が 7 つほど置かれていて、いずれも比較的新しいものである。墓碑の内容からすると夫婦合葬墓だったようだ。おそらく以前にあった墓碑の内容を転写し、さらに西暦を付加して作成したものかと思われる。

『文物地図』では、墓は南宋嘉定年間に造られ、墓の面積は 2000 平方メートルとしている。とすると、それは墓碑と封土のあるところだけでなく、かつて存在していたはずの墓道などを含めての面積と思われる。というのは、墓を調査した 1959 年段階で、馬・將軍・羊・豚などの石像があったらしいが、現時点ではいずれも存在しなかった。従って、調査段階では墓道など何らかの施設が存在していたと考えられるからである。これらの石像群は破壊されたのか、あるいは別の場所に一時的に移されたのかは不明である。

何澹は、官職は知枢密院・参知政事に至り、官を辞した後この地に移居し、開禧元年（1205）に通濟堰の竹木製の堰を石製に改修したとされている。しかし、『宋史』卷三四九の彼の伝には通濟堰修築の事は書かれていない。慶元党禁の主導者の一人であった彼は、党禁が緩和される直前の嘉泰元年（1201）に中央政界を離れ、党禁の責を免れたらしい¹⁰⁾。

以上のように、現在の何澹墓は調査された時点の景観をとどめていない。ただ、墓碑のある一段

高い所とその手前の平坦な場所、そして墓に向かって左右にわずかに残る木々の配置などは以前と変わっていないのかもしれない。

(2) 何処仁墓

何澹墓の見学を終え、再び碧湖鎮まで戻り、今度は大溪にかかる橋を渡って対岸に出、省道 53 号線を西南に向かい、通済堰のほぼ対岸にある大港頭鎮をめざした。『文物地図』の解説¹¹⁾では、何澹の子何処仁の墓が大港頭鎮大港頭村にあるとし、地図では大溪と松蔭溪が合流する地点に示されている。一方、前日に参観した通済堰文化園にある周辺案内図では、その墓を南宋の進士王信の墓とし、何処仁墓は何澹墓と同じ鳳凰山麓に図示されており、情報に齟齬がある。そこで、とりあえず『文物地図』の解説に依り、まずは大港頭村に行き、そこで情報を得ることにした。

「百度」の地図情報を手掛かりに大港頭鎮はずに到着したのは午後 1 時前だったが、そこは新街建設の最中だった。街の入り口にあった餐厅で尋ねてみたが、墓の情報は得られず、大港頭村のある場所を聞き、そちらに向かった。餐厅の前の通りを直進し、2 つ目の十字路を左に曲がり、少し歩くと左手に集落があった。その集落を越えていくと農道と合流し、左手に進むと「玉溪行政村」と刻まれた石板があり、ここが目指していた村のようだった。

村の入り口にある農家にいた中年の女性に尋ねると、何澹墓のことは知っていたが、何処仁については聞いたことがないという。さらに村内に入っていくと、大きな楠の古木とその右手に廟らしい建築物があった。その壁に「重建関王殿碑記」なる碑があり、それによると、南宋開禧年間(1205～1207)に参知政事の何澹が、3000 の処州兵を率いて通済堰を修繕し、第四子の何処信を連れて玉溪沿岸に村を建て、通済古道の道辺に関羽廟を建てた。廟はやがて関王殿と呼ばれるようになり、

温州に向かう運搬船の船乗りや筏師が安全を祈願した、とあり、この建築物が関王殿であった。

ガイドの J 氏が村の長老に聞いてみたが、何処仁については全く聞いたことがないということであった。『文物地図』でも、何処仁墓は 1959 年に調査し、白胎厚釉の耳瓶の残片と「慶元」年号のある墓誌が出土しただけで、早くに破壊されていたようである。結局、何処仁墓については新しい情報は得られず、その位置も不明のままであった。碑文に出てくる何処信に関する情報もなかった。



写真 5 関王殿

ところで、関王殿碑が依拠する『麗水市地名志』および『何氏宗譜』は未見であるが、地方志にいくつか関連する情報がある。清道光 26 年(1846)刻本の『麗水縣志』卷三「山水」に、「鷹鳥山」という山に関する記事がある。この山は通済堰の修築用の篠竹を伐採したところから別名「堰山」とも呼ばれ、この山に何澹が父の何称を葬り、山はやがて何氏の所有となり、その下を「平地」と称した。そしてその地には王信墓がある、と記されている¹²⁾。一方『文物地図』では、何称墓は通済堰に流れ込む松蔭溪のやや上流右岸に示されていて¹³⁾(実際は堰後村轄馬鄭の山中)、そこから東に向かい、大溪と合流する場所に何処仁墓が示されている。『麗水縣志』と『文物地図』によれば、松蔭溪と大溪の合流するこの場所に何処仁か王

信いずれかの墓があることになる。ただ、前述の文化園案内図が記す、何澹墓のある鳳凰山麓に何処仁墓の存在を窺わせるものはなかった。また大港頭鎮に向かう省道沿いに「王信夫婦墓」という標識があったこと、『文物地図』では王信夫婦墓が省道沿いに示されていること¹⁴⁾、二つの河川の合流地が何氏の属地であったとする『麗水縣志』の記述を勘案すると、『文物地図』の記載が正しいのではないかと考えた。また、清順治12年（1655）刻本の『龍泉縣志』によると、何処仁は何澹の長子で袁州の知州であったようである¹⁵⁾。

ところが、成稿直前に、鄧小南氏の「何澹与南宋龍泉何氏家族」なる論文があることを知った¹⁶⁾。この論文は何澹を中心に、龍泉何氏の盛衰を北宋後期から詳細に検討しており、石刻資料や族譜、文集等資史料を博搜されていて、何澹を論ずる上では必読のものであった。その中に通済堰周辺の何氏墓群のことも記されている。それによると、『通済堰古跡文物』（杭州：浙江戸籍出版社、2008年、未見）では、何偁・妻石氏墓が「堰山西側轎馬鄭村」に、何澹・妻朱氏墓および何処仁・妻陳氏墓が「鳳凰山上」に、王信・妻郭氏墓が「堰山南麓平地村」にあるとしている。これによるならば、通済堰文化園の案内図が正しいことになる。しかし、鄧氏の論文の中で引用されている「何偁墳志」「何澹墳志」（墓誌のことか）が記す埋葬地は『通済堰古跡文物』の内容と一致するのであるが、「何処仁墳志」だけは、その埋葬地を「合葬松陽縣惠洽郷高峰之原」としていて、まったく別の地名が記されているようだ。結局何処仁墓の所在地は不明と言わざるを得ない。この問題を解決するには、「平地」と呼ばれる堰山南麓の地にある墓と大港頭鎮にあるという「王信夫婦墓」を調査せざるを得ないであろう。

（兼田）

5 温州妙果寺訪問記

(1) 伽藍

温州市の松台山南麓に位置する妙果寺¹⁷⁾は天台系の寺院であり、温州市仏教協会が置かれている。現在の住持は達照法師¹⁸⁾、監院は二人おり、即ち則莊法師、則金法師である。妙果寺には一五名前後の僧侶が生活しているという。このことは帰国してから、年来の知友である上海師範大学の定源（王招国）教授よりうかがった。また達照法師は、もともと定源教授の師である上海師範大学哲学系の方廣錫教授に学んだ学生さんでもあり、定源教授の先輩にあたるというお話であった。

妙果寺の入り口は多くの車が通る幹線道路（人民西路）に面しており、道路を跨いだ反対側には妙果寺商場があり、骨董市が催され賑わっていた。書壇で高名な沙孟海の「妙果寺」の額が掲げられた山門、天王殿をくぐり、中へ進むと大雄寶殿が建つ。「大雄寶殿」の額は中国仏教協会会長、全国政協副主席等の要職にあった趙僕初の手書である。その額の下には、「宿覺名山」の扁額が掲げられ、こちらは温州出身の学者であり文人でもある南懷瑾の手書であった。その奥には二層建ての吉祥堂（一階）・迎賓閣（二階）、如意齋（一階）・藏經樓（二階）の樓房がある。全体にわたりこぢんまりとした伽藍である。寺内を観覧したあと寺の背後に聳える浄光塔へと向かった。途中には近年建てられたとおもわれる宿覺講堂が目に入った。急勾配の石段を登ると浄光塔の入り口にたどり着いた。今日の浄光塔（地下一層、地上七層）は後述のごとく唐代の永嘉玄覺の真身舍利塔を復元したものであり¹⁹⁾、内部は人々の昇降を右繞・左繞の螺旋式階段で分け、各層には信者らしき女性が案内役として配置されていた。浄光塔内の中心部分には白色の仏塔が建てられ、下方に永嘉玄覺像が祀られる。仏塔の壁面には永嘉玄覺の行状が金字で刻まれていた。浄光塔を降りてからは、永嘉大師紀念館を観覧し、浄光塔重建の際に出土

した文物等の知見を得た。妙果寺にはかつて北宋・大観四年に建造された千佛塔があったが、1951年、麗水温州をつなぐ道路拡張工事の途中で残念ながら壊されたとのことである²⁰⁾。なお我々が立ち寄る以前、日本からは1985年9月に駒澤大学中国仏教史蹟参観団が、1987年8月に鈴木哲雄氏がこの妙果寺を訪れている²¹⁾。



写真 6 大雄寶殿



写真 7 浄光塔



写真 8 永嘉大師塑像

(2) 妙果寺と永嘉玄覚

『永嘉県志』『温州府志』の記事に、たとえば「開元寺は習礼坊にあり、東晋年間に李整なるものが宅を捨て崇安寺を建て、唐代に開元寺と改名されている」とみえるように、温州における仏教の流伝は、晋代頃に遡るようである²²⁾。ちなみにこの開元寺は、宋代に妙果寺を興隆させる扶宗継忠が八歳で入山した寺院である。

さて、ここでは妙果寺にまつわる高僧、すなわち唐代の永嘉玄覚(665~713)²³⁾所伝について触

れておきたい。まず永嘉玄覚であるが、『宋高僧伝』巻八、『景德伝灯録』巻五、『釋門正統』巻八、『隆興仏教編年通論』巻一五、『仏祖統紀』巻一〇、『五灯会元』巻二、『仏祖歴代通載』巻一六、『禅宗永嘉集』等の僧伝・伝灯史に詳しい。いまは『宋高僧伝』巻八、唐温州龍興寺玄覚伝を掲出して概述することとする。

釋玄覺、字明道、俗姓戴氏、漢末祖侃公第五・燕公九代孫諱烈渡江、乃爲永嘉人也。總角出家、鬻年剃髮、心源本淨、智印全文、測不可思、解甚深義。……兄宣法師者、亦名僧也、并猶子二人、並預緇伍。覺本住龍興寺、一門歸信、連影精勤、定根確乎不移、疑樹忽焉自壞。……覺以獨學孤陋、三人有師、與東陽策禪師肩隨、遊方詢道、謁韶陽能禪師而得旨焉。或曰、「覺振錫遶庵答對」、語在別錄。至若神秀門庭、遐征問法、然終得心于曹溪耳。既決所疑、能留一宿、號曰一宿覺、猶半徧清也。以先天二年十月十七日於龍興別院端坐入定、怡然不動。僧侶悲號、以其年十一月十三日殯于西山之陽、春秋四十九。……後李北海邕爲守括州、遂列覺行録爲碑、號神道焉。覺唱道著明、修證悟入、慶州刺史魏靖都緝綴之、號永嘉集是也。初覺與左溪朗公爲道契、朗貽書招覺山棲、覺由是念朗之滯見于山、拘情於講、迴書激勸、其辭婉靡、其理明白。俾其山世一如、喧靜互用、趣入之意、暗詮于是、達者趨之。終、勅諡號無相、塔曰淨光焉。

永嘉玄覚は温州永嘉の人で、字は明道、俗姓は戴氏。幼くして出家し、經・律・論の三蔵を学び、天台止觀の完全無欠で明瞭な(圓滿融通)法門に精通していた(『景德伝灯録』)。兄の宣法師も名僧であり、子供二人も皆僧侶(緇伍)となった。玄覚は龍興寺に住し、戴氏一族も仏門に帰依した。東陽玄策禪師とともに曹溪の六祖慧能に参じた。玄覚が錫杖を振るって瓶を持ち、六祖の周辺を三度繞ると、六祖との問答がはじまる。六祖曰く「夫

れ沙門（そうりょ）には三千の立ち居振る舞い（威儀）と八万の悪を制止する細かな律儀（細行）とがある。あなた（大徳）は何処より来られて、心がおごり高ぶっているのですか（大我慢）」と。師（玄覚）曰く「（威儀や細行より）生死の事の方が重大です。無常迅速なのです」と（『景德伝灯録』）。……六祖は善きかな善きかなと感心し、玄覚に一宿留まることをすすめた。これにより玄覚は「一宿覚」と呼ばれた。翌日下山し温州に帰ると教学を学ぼうとする者が四方から集まり、真覚大師と呼ばれ禪を賑わすこととなった（『景德伝灯録』）。玄覚は先天二年（玄宗、713）十月十七日龍興別院において端坐し入定した。怡然として動かず、僧侶たちは悲しみにくれた。その年十一月十三日西山に殯した。四十九歳であった。勅により諡号を無相大師と賜り、塔を浄光と呼んだ。のち括州刺史李邕は神道碑銘を作り、慶州刺史魏靖（あるいは魏静）²⁴は玄覚の文章を編み『永嘉集』を作り後世に伝えた。玄覚の著に『証道歌』がある²⁵。

以上が唐代における永嘉玄覚の行状であるが、『永嘉県志』²⁶の所伝によると憲宗の元和中（806～820）刺史の杜賁が墓を発見し、玄覚の遺骸を松台山上に安置して真身舍利塔を建て、僖宗は名を浄光と賜り、無相大師と諡号したという。これによって松台山は浄光山とも呼ばれる。昭宗・光化二年（898）には浄光禪寺と賜額された。宋代以後になると、宋の太宗は扁額を「宿覺名山」と賜う。なお清代になると地方志等では康熙帝の諱を避けて玄覚は元覚と記され、また雍正帝は封号を洞明妙智禪師とした²⁷。永嘉玄覚は唐代から清代までの歴代皇帝に諡号を賜る高僧として認められていたわけである。

（3）仏塔・舍利塔

現在の妙果寺、とりわけ浄光塔は、温州の人々の憩いの場としての九山公園のランドマークともなっていた。前節でのべたように、浄光塔はも

ともと永嘉玄覚の真身舍利塔であった。温州の地を訪れて驚かされるのは、古来の仏塔や石塔が数多くみられることである²⁸。その中でも舍利塔の問題は庶民や官僚らの一般の墓とは別の視角、次元で論じなければならぬであろう。ふつう舍利塔というと仏祖釈尊を想起するが、中国では高僧の舍利塔も多く確認される。高僧の舍利塔では、後秦（姚秦）の訳経僧・鳩摩羅什（クマラ・ジーヴァ）の舍利塔（陝西省西安）、玄奘三蔵の舍利塔（陝西省西安、興教護国寺）、天台智顛の舍利塔・真覚寺（智者塔院）（浙江省天台山）などが知られている。これらは一面、舍利信仰とも結びつく。特に玄奘などは現在、南京・玄奘寺、西安・大慈恩寺、台北・玄奘寺、日本の埼玉県岩槻・慈恩寺等各地に分散されている。一方、仏舍利に関しては宋代頃に仏牙信仰も流行し、日本の中世社会に伝播する²⁹。この訪問記では永嘉玄覚の伝と浄光塔を跡づけたが、舍利塔が後世どのように祀られてゆくのか、どのような影響を及ぼすのか、このあたりも今後議論の俎上にのせなければならない問題であろう。

（石川）

6 温州市葉適関連文物（葉文定公祠、葉公廟、葉適墓）

葉適（1150～1223）。温州永嘉出身。事功派永嘉学派を代表する学者である。永嘉学派は商業経済などの実学を重視することに特徴がある。葉適思想の特徴も形而上ではなく形而下の現実的な〈物〉を第一に考える点にあり、財政や経済に関する文章を多く残している。それゆえ、前近代思想とはいえマルクス主義唯物論の立場からも評価できる対象であり、改革開放の現在ではさらに葉適の評価は高まっているようである。温州市の新地方志『温州市志』（1998年刊行）では、とくに「永嘉学派」という一章がたてられ、その学統や思想について概述されている。そして「今日の

人々が改革開放後に“温州モデル”³⁰⁾がうまれた思想的淵源を探求しようとするさいには、やはり永嘉学派の事功思想のなかからある種の関連を見出すことができるのである」と今日的な意義が評価されているのである³¹⁾。今回は、温州市内で葉適が墓や祠堂等でどのような顕彰がされているのかを観察するとともに、あわせて葉適一家の墓づくりについて考察することとした。

(1) 葉文定公祠と葉公廟

筆者の手元にある『葉適集』(全三冊、中華書局、1961年)第一冊の扉には「葉適塑像」の写真が掲載されており、「温州市金鎖匙巷葉水心祠」と記されている。また『文物地図』には「葉文定公祠」の項目があり、その所在を金鎖匙巷として記している。「葉水心祠」と「葉文定公祠」は同一の史跡に間違いない。金鎖匙巷は細い通りだとのことで、近くにバスを止めて歩くことになった。金鎖匙巷の一本南の通りは清朝時代の民居や民国時代の銀行などの歴史建築があり、また金鎖匙巷に入る曲がり角には19世紀所建の「城西基督教堂」(浙江省文物保護単位)があるなど、散策には好適なところである。

ところが、確かにその地番の地にたどり着いたが、それらしきものは全くなかった。あたりにはまるで長屋のごとく似たような外観の平屋建ての一般民居が続いているだけだった。「葉文定公祠」は温州市の市級文物保護単位に指定されていたはずであったが、それを示す表示はない。その家にも通りも人がいなかったため、聞くこともできず引き返してきた。

後日、温州新聞2019年7月の報道³²⁾がネットに掲載されていたのを見つけた。この記事には金鎖匙巷の「葉文定公祠」は温州市の文物保護指定を解除されたとしてその経緯が書かれていた。この建物はそもそも葉適祭祀専用の建物ではなく、葉氏の子孫が暮らす個人所有の家でもあったが、

老朽化により雨漏りや亀裂が深刻で住むことができない状況となり、2018年に住居として修築を行ったことによって、史跡ではなくなったのであった。もちろん、いったん文物保護単位に認定されると、政府の複数の部門の許可がないと修築修繕などはできない。この家の葉氏住人が十数年にわたり修築について請願を行ってきたところ、最終的に以下のような内容の市政府の判断が出たという。瓠江南岸に現在建築計画中の「葉適記念館」に「葉文定公祠」の額をかける。文物保護単位の名称は変更しない。金鎖匙巷23号³³⁾は今後は文物保護対象とはみなさない。戸主はその家を自弁で修築すること。

この記事ではじめて温州市内に葉適記念館を新たに建設する計画があることを知った。温州市側に葉適を顕彰したいという意向があるのうかがえる。またこのような措置が取られたとすれば、温州葉文定公祠は実際には保存できなかったにもかかわらず、書類上は保護し続けている形がとれ、文物保護担当部局の体面は保てる。しかし、金鎖匙巷23号の葉文定公祠は康熙九年(1670)から300年以上にわたって葉適を祀り続けてきた歴史を持っていた。それを突然特にゆかりもない場所に建てた真新しい祠堂に額をかけてそれで祠廟が継承されたことになるというのは、にわかには受け止めかねる感覚ではある。

その一方、百度地図で葉適の晩年の居住地・水心村のあたりを検索していると、「葉公廟」という名称の建物があるのを発見したので、行ってみることにした。「水心路」という路名表示に、やや心躍らせながら到着したところ、どうも様子が異なっていた。たしかに「葉公廟」と書かれた小さな額はかけられていたものの、どこをどうみても道観だった。よくみるとこの廟には「温州市鹿城区道教教会松台街道恵応観」という看板もあり、恵応観という名の道観と思われた。さらにこの廟のすぐ隣には石橋が架かっていた。傍らに石碑が

あり「地蔵橋」との名称で温州市文物保護単位に指定されていた。解説文を読むと、すぐ隣に地蔵王廟があるのでこの名がついた、と書かれていた。この近くの廟といえば隣にあるこの廟しかないが、地蔵王廟という名であれば道教でなく仏教寺院ということになる。いったいどういうことなのか全く見当もつかなかったが、すでに日暮れて廟は閉まり無人であったため、翌朝また出直すことにした。

翌朝再度出向いてこの廟の人に聞いてみると、ここは「恵応観」という名の道観であり、かつてはあった地蔵王廟は壊れていまはないとの答えであった。ではここは葉公廟でもあるのか聞いてみたところ、回答は、いまから24～5年ぐらい前のことだったと思うが、地元の名士を顕彰しようということになって、葉適の像を作ったことがある。二階にその像がある、とのことであった。見ていくようにと言ってもらえたので二階に上がったところ、二階は完全に倉庫になっていて様々な物品が雑然とおかれており、その中に確かに像もあった。像の後ろには葉適の名号も記された背景画が設置され、像には柵がめぐらせてあったので、ここで葉適が祭られていた時期があったことはわかる。しかしいまや完全に倉庫内の一物品という趣であった。水心の地は、かつて葉適が晩年を過ごした地であり、その号の由来となっているのにもかかわらず、この地での葉適祭祀は、いささか寂しい状況といわざるを得ない。

その一方、葉適の出生地・瑞安では葉適記念館（葉文定祠）が建てられ盛んに祭祀活動が行われているようである³⁴。瑞安は確かに葉適の出生地ではあるが、本貫の地ではなく、また14歳の年に洪水で家産を失って後は永嘉に移り住み、その後瑞安に住むことはなかった³⁵。暮らした年月と水心の号から考えれば、温州水心こそ祈念に相応しい地であるようにおもわれる。しかし現状における葉適祭祀が瑞安中心になっていることは、先

人明賢の祭祀記念活動とは、それを祀ろうとする子孫一族にかかっている面が大きいということを改めて示していよう。

(2) 葉適墓

葉適墓は「海壇山南麓慈山に在り」（『永嘉県志』）と記される。海壇山は温州市街地のただ中にある山、というより我々の感覚からは丘陵に近く、山全体が「海壇山景区」「海壇山公園」として美しく整備されていた。公園内の掲示板には、海壇山は高さ32.5メートル、平面面積3.25平方メートルとあり、またその沿革については次のように記されていた。

歴史上海壇山には古跡が多く、著名なものとしては晋代の郭仙庵、白鹿庵、梁代の悟真道院、唐代の嘉福寺、海神廟、楊府廟、宋代の天寧寺、明代の五靈廟がある。現在海壇山上には国際海員クラブが建てられており、山坪に愛民模範の趙爾春烈士の塑像がある。歩を緩めて行くと、海壇山の支阜慈山に宋代の著名な思想家、文学家で永嘉学派を代表する人物葉適の墓がある。

さて実際の葉適墓は、南西方向に眺望が開け、いかにも風水が良いだろう場所に作られていた。ただ墓だけとってみれば平均的な大きさのものであり、特に美々しく整備されているというわけではなかった。



写真9 葉適墓



写真 10 葉適の経歴を讃えた石板³⁶⁾



写真 11 永康學派を顕彰した石板³⁷⁾

しかし、墓をめぐる公園全体の仕掛けが圧倒的で衝撃的だった。山の南側の平地は一面に石畳となっている。山に向かって全体の正面の位置に敷かれた特大の石板は、或いは葉適の経歴を称え、或いは永康學派を顕彰する語が刻まれており、位置的にまるで葉適墓の神道碑のような役割を果たしているように感じられた。

つまりこの大判の石板をみながら正面の海壇山を眺めると、まるで海壇山全体が葉適墓のように見えるようなしかけになっているのである。少なくとも筆者はそのように受け取った。そして山全体が葉適墓なのかと思ひこみ、皇帝でもないのに、これは称揚するにしてもやりすぎだろうと驚きあきれながら山を登ったのだった。実際に葉適墓についてみれば、きわめて通常のつつまじやかな墓だったことに逆にびっくりし、山全体が葉適墓というのは勘違いだったことが分かったので

あるが、しかし大判のレンガタイルを複数³⁸⁾配置するだけで山全体を葉適墓のようにみせるとは、なんとも見事な発想である。

なお石畳は上述の大判の石版のほか、時にことわざのような語句を刻んだ石板もところどころに嵌められていた。私にはよく意味が解らないものも多かったが、とりあえず目についたものを列記する。「未学打箴先学句 未学小且先学扭」「和尚頭断爻剃」「泥鯁打地洞一路路通」「日里東家到西家 夜里点燈紡棉紗」「天羅瓜花配酒一情義重」「山頭人送番薯種一礼輕意重」「牛身上拔條毛一覺不著」「人著心好 樹著根牢」「一家不知一家事 正宮娘娘滅苧絲」。葉適の著作からではなく、あえて卑近なことわざから言葉を選んだのは、人民への一般的な啓発を旨とする市政府関係者の意図が感じられる。

さて、最後に、墓葬からみた葉適の家族について付言しておきたい。葉適墓は単葬墓で妻は合葬されていない。妻の高夫人は、海壇山から南西に6キロの距離にある護国寺山に墓が作られた³⁹⁾。南方諸地域で広くみられる夫婦別葬形式であり、夫婦同葬を根拠に夫妻一体の中国家族法の原理を説いた滋賀秀三説⁴⁰⁾とは相反するものである。

さて葉適は優れた墓碑銘を書いたことで文学史上にもその名を留める存在であるが、葉適自身が書いた家族の墓誌銘として『水心文集』に収められているのは、母、妻、そして四歳で夭折したむすめのものだけである。なぜ父祖の墓誌銘がなく、女性家族構成員の墓誌銘だけがあるのかは未詳であるが、ともあれこういった事情で家族の男性構成員の埋葬地については知る手がかりがない。また母杜氏については墓誌銘こそあるものの、「某年某月某日、家君以夫人之喪葬於某某某郷某山。」⁴¹⁾と、死去の年月も埋葬地も伏せられていて不明であり、またこれらの情報が伏せられている理由もまた未詳である。さてわずか四歳で夭折し

た媛女の瘞銘⁴²⁾には「蓋媛以淳熙十四年七月二十八日死、明日瘞錢塘門外寶勝寺後。」と死去日と埋葬地がともに記されている。墓碑銘ではなく瘞銘と称されて差別化されており、また亡くなった翌日に葬られていることから簡便な葬儀であったことがうかがえるが、しかし自らの手で墓をつくり手厚く葬っていることがわかる。未婚のむすめについて墓誌銘や墓をつくっているのは程頤や朱熹らと同様の行為である。滋賀秀三『中国家族法の原理』では未成年死亡者は正規の家族成員とはみなさず自家の墳墓地には埋葬しないと記されているが、程頤や朱熹らと同様、葉適にも滋賀原理でというような観念は働いていないとみてとるべきであろう。

（佐々木）

7 今回の調査を終えて

今回麗水から温州を訪ねてみて体感したのは、山が多く平地が少ない地形や墓葬慣行、地域史の重要視など様々な点において福建に近い要素がみられたことであった。

当地の宋代古墓の墓葬形式からは、これまで我々が福建・江西で観察してきたと同様の結果を得ることができた。夫婦別葬が夫婦同葬と同様に普遍的にみられること、家族墓地の不存在、未婚のむすめの墓づくりの三点である。麗水の何澹は朱子学弾圧の立役者であり、温州の葉適は朱子学の対抗思想の持ち主であるが、墓づくりについては福建の朱熹や朱子学人士と特に相違はみられなかった。そして何澹は通濟堰改修にも尽力し

た当地出身の大官として、そして葉適は闊達な経済行為で知られる温州人の思想的淵源永嘉学派の雄として、現在も顕彰が行われていた。

何氏家族関係の墓の探訪は時間の関係もあって三か所にとどまり、かつ王処仁墓については先行諸書の記載不備もあり探し当てることができなかったが、今後の研究の手がかりを得ることができた。今回の調査で王処仁墓の特定のためには王信夫妻墓の特定が必要であることが判明したが、王信夫妻とは、何澹のむすめ道静の夫王陶の父母のことであり、かつ王陶・何道静夫妻については墓誌がのこっているという⁴³⁾。つまり何氏家族については、むすめの嫁ぎ先の一家との関係を墓の立地という視点から考察できる可能性があることが今回の調査で判明したことになる。この点については今後さらに調査考察を深めていくこととしたい。

（佐々木）

【謝辞】本稿は JSPS 科研費 17H04525 および 17H022463 の助成をうけた研究成果の一部である。

（ささき めぐみ：島根大学法文学部教授）

（おおさわ まさあき：東洋文庫研究員）

（かねだ しんいちろう：獨協大学国際教養学部非常勤講師）

（いしかわ しげお：東洋文庫研究員）

（とだ ゆうじ：常葉大学外国語学部教授）

1) これまでの調査については、以下の諸篇で成果報告を行っている。佐々木愛・大澤正昭・石川重雄・戸田裕司・小川快之「江西省歴史調査報告—宋代古墓を中心として（吉安・撫州篇）」『社会文化論集』14号、2018年。佐々木愛「浙江省歴史調査報告—宋代古墓を中心として（武義・天台山・寧波篇）」『東京大学経済学部資料室年報』8号、2018年。佐々木愛・大澤正昭・石川重雄・戸田裕司・小川快之「浙江西部・福建北東部歴史調査報告—宋代古墓を中心として」『東京大学経済学部資料室年報』9号、2019年。佐々木愛・大澤正昭・石川重雄・戸田裕司・小川快之・小島浩之「淮河中流域歴史調査報告—宋代古墓を中心として（蚌埠・鳳陽・合肥篇）」『社会文化論集』16号、2020年。

2) 『宋史』卷三八六范成大伝に「溉田二十萬畝、……壘石築防、置堤閘四十九所、立水則、上中下溉灌有序、民

食其利」とある。

- 3) 『中国文物地図集』浙江分冊(上下2冊)、国家文物局主編、文物出版社、2009年。下冊663頁に「何称墓〔碧湖鎮堰後村轎馬鄭東南側・南宋〕」の項目がある。
- 4) 張瑞清(1913-2000)・葉樹媽(1921-2003)なる夫婦の墓。
- 5) ガイドのJ氏(杭州人)が通訳をつとめてくれたが、急な事でもあり、訳が追いつかない事もしばしばであった。また、Z氏が話し始めて数分後から録音(スマートホンのボイスレコーダー)をとり、帰国後執筆分担者(戸田)がネイティブの助けも得ながら聞き直したが、力の及ばなかった箇所も少なくない。因みに、Z氏は調査当時75歳とのことであったので、発掘調査が行われた時点では15歳であったはずである。本人も調査を手伝ったわけでもなく、実見したわけでもないと言っているの、この記録は、伝聞の伝聞、あるいは地域に伝承されている逸話をZ氏が紹介した、という性質のものである。
- 6) Z氏は小柄で、身長は160cmにやや足りないかと見えた。
- 7) 「棺材」については、「二つの「床」」、「二つの「洞」」という表現もしていたが、厳密な使い分けをしているわけではなく、大雑把に墳墓を指していると理解した。
- 8) 前掲註1佐々木愛・大澤正昭・石川重雄・戸田裕司・小川快之「浙江西部・福建北東部歴史調査報告—宋代古墓を中心として—」(『東京大学経済学部資料室年報』第9号、2019年)の小川執筆部分参照。
- 9) 前掲註3『文物地図』、上冊293頁、下冊663頁参照。
- 10) 『宋史』卷三十八嘉泰元年秋七月条に「秋七月乙卯、何澹罷。」とあり、彼は嘉泰元年(1201)に知樞密院事を罷めている。また、『宋史』卷三四九何澹伝には「……急於榮進、阿附權奸、斥逐善類、主偽黨之禁、賢士爲之一空、其後更化、兇黨俱逐、澹以早退幸免、優游散地幾二十年。」とあり、慶元の党禁後、責を免れ閑職に就くこと20年近くとしている。彼の没年は嘉定12年(1219)とされており、知樞密院事をやめてから19年目であり、一応符合する。
- 11) 前掲註9書同頁参照。
- 12) 張銑纂修『麗水縣志』(中国科学院図書館選編『稀見中国地方志彙刊』第19冊所収、中国書店、1992年)卷三「山水」(第二十三葉裏)に、「鷹鳥山 在縣南五十里、鄉時通濟堰每年興築伐篠於山、又名堰山、宋龍泉何澹、葬其父於山、而固堰以石篠廢不用、山遂屬何氏、其下名平地、明景泰間都御史張楷、搜山殺賊於此、有宋給事王信墓。」とある。
- 13) 前掲註9書参照。また前掲『麗水縣志』卷六「冢墓」(第三葉裏)に「宋贈太師何僞墓 在縣西五十五里堰山、神道碑尚存(案僞龍泉人、爲太傅執中之孫參政何澹之父(下略))。」とあり、何称の墓のある堰後村轎馬鄭の山が「堰山」であり、それは卷三「山水」に登場する「鷹鳥山」と同一と考えられる。
- 14) ちなみに、前掲「冢墓」は何僞墓に続けて王信墓のことを記し、「宋給事中王信墓 在十六都保定、墓誌尚存、番陽洪邁撰文、妻郭碩人、墓誌永嘉戴溪撰文、俱詳括蒼金石志。」とあり、王信墓が「十六都」にあるとする。そして、『麗水縣志』卷一「冢」に載る「麗水縣境全冢」を見ると「十六都」は大溪の右岸地域を示しており、王信墓は現在の大港頭鎮にあることになる。
- 15) 徐可先修、胡世定纂『龍泉縣志』(中国科学院図書館選編『稀見中国地方志彙刊』第19冊所収、中国書店、1992年)卷八「人物 經濟」(第三十九葉裏)に「何澹字自然(中略)長子處仁知袁州、處仁子宗姚(下略)。」と何処仁のことが簡単に記されている。また、同書卷五「選舉 任子」(第二十四葉裏)には、「何処仁(以父澹澤仕大理寺少卿)何処禮(以父澹澤仕温州通判)何処信(以父澹澤仕口部郎中)」とあり、「重建闕王殿碑」に載る何処信が何澹の子として実在したことが判明するが、それ以外に彼らに関する情報は現時点では見つからない。
- 16) 鄧小南「何澹与南宋龍泉何氏家族」(『北京大学学报』(哲学社会科学版)2013年2期)。
- 17) 百度百科、維基百科の記事「妙果寺」の項目などでは、温州妙果寺について唐・神龍年間(705-706)、宿覺大師(永嘉玄覺)の創建と伝えるものや、北宋・大中祥符元年(1008)妙果文昌の創建(あるいは重建)、繼忠の頃に最盛期を迎えると伝えるものがある。これらの記事に関しては、地方志や僧伝等の典拠が不明瞭な点も多い。清・李琬修、清・齊召南等纂『同治温州府志』卷二五、清・鄭廷俊等修、清・林占春等纂『康熙永嘉縣志』卷三、清・張寶琳修、清・王棻等纂『光緒永嘉縣志』卷三六等を繰ってみると「妙果寺、在集雲廂、順治十五年燬、康熙十四年重建。……」とみえるごとく、いずれも唐宋時代については触れていない。ただし明・王瓚、蔡芳編纂、胡珠生校注『弘治温州府志』(温州文献叢書第三輯、上海社会科学院出版社、2006年)では、北宋・大中祥符元年(1008)妙果文昌の創建とする。温州妙果寺に関する学術的研究としては馬叢叢『妙果寺志』(上海師範大学、宗教学碩士論文、2014年)が挙げられる。馬氏は妙果寺について北宋・大中祥符元年(1008)妙果文昌の創建という説明をされている。
- 18) 達照法師の経歴をみると、1994年に中国仏学院に入り、1998年中国仏学院研究生院に進み、そこで方廣錫教授に仏教文献学を習う、とある。現在、以下のごとく多くの要職に任じられている。中国仏教協会理事、浙江省仏教協会副会長、温州市仏教協会副会長、文成県仏教協会名誉会長、浙江仏学院温州仏学院福院長、温州仏教永嘉禅学会会長など(百度百科「達照法師」の項)。
- 19) 松台山の浄光塔は2002年に重建工事が始まり、多くの文物や永嘉玄覺真身とおぼしき舍利が出土している。2013年11月、永嘉大師圓寂1300年の式典が催され、「永嘉大師舍利子入塔法会」も営まれた。『永嘉大師圓寂1300周年紀念大典匯編』温州市仏教協会、2013年。張春泉「永嘉禅文化内容及当代價值探討」『浙江工貿職業技術学院学报』18卷3期、2018年。「温州浄光塔發現舍利子」『旅游縱覽』2003年5期、44頁。なお、村田次

郎『支那の佛塔』（富山房、1940年）によれば、「中国における仏塔は、当初から殆どすべて地下深く舍利を納めるのを常としていた。塔が墓としての本来の性質を具現してきた。」と説明される。

- 20) 維基百科「妙果寺」参照。
- 21) 『中国佛蹟見聞記』七集、1986年、巻頭写真（永嘉玄覺所住の妙樂寺）、18頁。妙樂寺は妙果寺の誤記であろう。鈴木哲雄『浙江江西地方禪宗史蹟訪録』（山喜房佛書林、1997年）51頁。
- 22) 清・鄭廷俊等修、清・林占春等纂『康熙永嘉県志』巻三、寺觀、「開元寺、在習礼坊。晉李整捨宅建爲崇安寺。唐改開元。宋置御書閣・藏經院・千佛院。明光武立爲叢林」。温州市史編纂委員會編『温州市史Ⅲ』中華書局、1998年（第二章仏教、第一節流伝、第二節寺院、第三節仏教文化交流）参照。温州開元寺については、前掲註21鈴木哲雄『浙江江西地方禪宗史蹟訪録』51頁にも開元寺跡の写真とともに言及がある。
- 23) 永嘉玄覺については、以下を参照した。『望月仏教大辞典（増訂版）』（世界聖典刊行協会、1973年）「玄覺」。鷲阪宗演「永嘉玄覺の禪觀」『禪文化研究所紀要』7、1975年。池田魯參「永嘉玄覺の禪思想」『財団法人松ヶ岡文庫研究年報』26、2012年。関口眞大『禪宗思想史』山喜房佛書林、1964年。『鈴木大拙全集』二巻「禪思想史研究」岩波書店、1968年。梶谷宗忍・柳田聖山・辻村公一『禪の語録』16「信心銘・証道歌・十牛図・坐禪儀」筑摩書房、1974年。
- 24) 『宋高僧伝』『景德伝灯録』『仏祖統紀』は魏靖に作り、『釋門正統』は魏静に作る。『宋史』巻二〇五芸文志では、「魏静永嘉一宿覺禪宗集一卷」とみえている。
- 25) 玄覺の著作とされる『証道歌』については、玄覺に仮託された九世紀における天台系の作者のものであるとする学説が定着している。前掲註23各論著参照。
- 26) 前掲註17『光緒永嘉県志』巻三六禪志、方外、元覺、『同志』巻三六禪志、寺觀、淨光禪寺。
- 27) 『天台四教儀註彙補輔宏記』巻九之上（巳統蔵）「……永嘉、乃東甌首邑之名也。大師者、即玄覺禪師、國朝封號洞明妙智禪師、本永嘉人也。悟道弘法、始終皆居本處。今稱永嘉者、蓋尊其處、隱其諱也。……」
- 28) 温州古塔名塔<http://blog.sina.com.cn/s/blog_d1ed52d60101e7d1.html>参照（2020年3月1日確認）。
- 29) 大塚紀弘『日宋貿易と仏教文化』吉川弘文館、2017年参照。
- 30) 温州モデルとは、1980年代半ば以降の郷鎮企業の生成発展が、私有制、家庭工場および商人ネットワークを土台になっているものをいう。巖善平「温州モデルと蘇南モデル」『三田学会雑誌』96巻4号、2004年参照。
- 31) 周夢江「宋代義理之辨と葉適対朱熹の批評—兼論温州商業社会と永嘉学派的关系」『温州師範学院学报』（哲学社会科学版）25-1、2004年は、永嘉学派の功利学説と重商思想が温州社会の発展に影響を与えたと主張する。
- 32) 「紀念叶适的叶文定公祠為何變樣？文保姓“私”誰來養護」温州新聞網、2019年7月4日<<http://news.66wz.com/system/2019/07/04/105175754.shtml>>（2020年2月28日最終確認）。
- 33) 『中国文物地図集』（浙江分冊）や温州文化遺産網では、葉文定公祠の所在地を金鎖匙巷19号と記している。しかし温州文化遺産網に掲げられた葉文定公祠の写真（通常の民居の前に文物保護単位の碑が立てられている）には、住居表示の「23」というプレートがはっきり映っている。文物保護単位指定時以後に、地番の変更があったことが考えられる。
- 34) 瑞安の葉適記念館は葉氏一族により2003年に開館している。葉適記念館<<http://www.cc.ccoo.cn/webdiy/787-75839-17217/agjd02.html>>、「叶适紀念館全新亮相」瑞安日報2019年1月4日<http://www.rarb.cn/html/2019-01/04/content_231486.htm>、「叶适后裔紀念先賢弘揚家風」瑞安日報2019年4月23日<http://www.rarb.cn/html/2019-04/23/content_245249.htm>（リンクの最終確認はいずれも2020年3月1日）。
- 35) 張義徳『葉適評伝』南京大学出版社、1994年。
- 36) 「淳熙五年（1178年）葉適中榜眼 歴任孝宗光宗寧宗 □□歴官平江府觀察推官大学博士尚書左選郎知泉州国子司業兵部侍郎等職 曾□与策划 紹熙内禅」と刻まれている（□は判読不能字）。
- 37) 「孝宗乾道 淳熙年間（1165-1189）以薛季宣 陳傅良 葉適為代表的永嘉学派 注重事功用 与朱熹的道学陸九淵的心学 鼎足而立 影響很大」と刻まれている。
- 38) 大判の石版としては上記のほか、葉適の死をつたえ葉適の評価を記したものがあつた。「寧宗嘉定十六年（1223）一月二十葉適逝世 葉適永嘉学派之集大成者 人称水心先生 著有習学紀言 水心文集」
- 39) 『水心文集』巻一四、高夫人墓誌銘。
- 40) 滋賀秀三『中国家族法の原理』創文社、1967年。
- 41) 『水心文集』巻二五、母杜氏墓誌。母の墓誌銘のなかで興味深い記述は「子四人、逮・適・過・還。幼養潘氏女一人、許嫁矣。」と、実子に加えて、童養媳として育てたむすめを養女として記していることである。
- 42) 『水心文集』巻一三、媛女瘞銘。「媛女始生能誰認、俄病癘不省憶、四年而夭、將絶、忽左右顧應答累、長愰淚下、與其母訣。余多險艱、垂四十矣。初有二女、連歲皆失之、故與高氏頗自傷、又傷媛之難成也。蓋媛以淳熙十四年七月二十八日死、明日瘞錢塘門外寶勝寺後。龍泉葉適記。」
- 43) 鄧小南「何澹与南宋龍泉何氏家族」（『北京大学学报』（哲学社会科学版）2013年2期）。